

47

84-90

留  
1327  
27

新日本

5/11

42 12 =

南洋群島の交通を論ず



五ノ武取七頁

久米邦武

南洋の駿波島と安島伊奈島

去る明治四十五年七月九日、商船學校練習船大成丸が東京

品川を放船して風帆を繰りつて太平洋を南米の角を回し、伊

度南洋を乗けて濠洲へ本年(大正)十月七日品川に歸港す。

其日数は一周年と四ヶ月を餘し、航程三萬六千哩に過ぎず。

くは南半球の星象を觀し、又極風極雨を觀し、壯烈な航海を

終へし事、歴史に光輝を放つ偉業を遺すしのである。最後

に濠洲の富田フリマントル共を發して駿波島と安島伊奈島と

を寄り、直航して我島川に着けり。航海に於て、鮮やかな層層

と雲やれ、地は南洋の小島にすぎないワレども、是は日本の將來

に 南洋を經て濠洲へ航路を往反し、産業を發達し、必要の

地地があるといふ大成丸の航路を、その所であるは、探検の邊

りな事、特に注目して、傾聴すべき有るを淡である。

抑、我々南洋に對し、非ざる諸島の、南洋を濠洲に航

洲に至るまでの洋面は、大小の島を往の如くに撒布して、

之を廻る南洋群島と稱へられ、皆赤道の左に於て、

裸體の土人が住み、極度の暑さを見、經つて度外

に放棄し、地圖を見れば、日本の南より、濠洲までの洋海面は、

大抵縮小された地圖であり、割縮圖に、比較的、

と日本支那の沿岸より、濠洲までを、圖すれば、

特別  
ツ1  
3987

東洋文庫



南

日本

り

曰く是の幅面を以て故に節約されて形勢を視ると南より北に  
因て北に注意を以て人をして非之者の南に在る重なる  
泥阿蘇莫答刺瓜哇の四島を我日本と大を以て較する程の國と  
數ある程に止まり地は概して不問に附せられぬれど濠洲への航路  
に必由の海驛を以て港を有し其島嶼多し今度大成丸が  
瀬踏した駿安と安莫伊那とは即ちそれである。

其東の洋海に連なりたるを莫度が群島といふ安莫伊那は其  
南の島である又その群島の南南洋海に東より西向を平  
列した瓜哇に在りたるを巽地群島といふ駿波を其一とあり

れ日本より濠洲へ航海の要地に在りたる島である南洋群島  
の間は何處へ向し航路を通ずるを疑はざる大抵の往來は  
自然に必由の海路を定めらるるありて南洋群島に於ては  
古來三つの海門がある。

巽地は其一であつて蘇幕答刺と瓜哇との間の海峡に與り  
名である先年日露戰爭の時この露國の兵船が艦隊を印度洋  
を垂けて通過しつらけ此海峡であつたことは尚ほ記憶されて居  
るであらう此の四島餘り其國人が喜望峯の航路を開い  
てからは東の洋海に門を以てやがて荷蘭國は其東の瓜哇  
を以て南の洋海に門を以て附屬した島々を併せ

南洋群島

巽地群島と稱す。其の南に英國が印度を台領し、  
 大陸に於ける滿刺加半島と蘇英答刺の間が將来由  
 航路となるべきを見ゆ。新嘉坡港を開き、果して此を  
 航海の水路となすれば、近き蘇士運河の開鑿よりなるに  
 比し、遠運に劣り、巽地は表つて、其の東に又其  
 三爪哇の東に於る論泊島と波里島との間の海峡が門戸を  
 成する。因て今度大成丸は此を通過し、駝波の港に寄泊  
 してある。以上が東の南洋を通過する三海峡である。將来  
 濠洲の開くに從つて駝波を必ず第一の新嘉坡とするべき  
 有望の港は、皆駝波であらうと見ゆ。

莫鹿は西里石の東に、群島であつて瓜哇と新  
 嘉坡間の航路の關係に於て、日本と濠洲と自  
 航するに於て、必ず經由する位地である。安慕里那  
 は、安衝に立、かつ島である。

さて巽地群島は瓜哇の東に、僅かの海を隔て、南緯度の  
 線に東の半島と平列してある。其形は恰も我肥國松浦郡  
 平戸五島の群島に彷彿する。先づ瓜哇の東を前  
 した論泊島で次に波里島である。西島は各面積二、三  
 里にすぎぬ。小島をれど平地多く、田舎や半島を移す  
 産する。此間の海峡は潮流の激しく、所をた拘りず

融橋志聚



によりて總稱をなされてゐる。其は萬地を總率の火山島が遊軍  
 をなして島勢は甚き漸々たるは我日本に連なる東南の巴  
 布至大島に新吉尼申といふ據吏の棲息し居る島である  
 安慕伊那の西に武の西にあり小島で西南は遠く西の東端は南  
 兒に對するは此の南洋を此の統治所を設け附近の砲臺を築  
 いて西群島を鎮壓してゐる。日本は南洋の海軍に備へて  
 地を以て我が日本を以て居るべきは此の南洋に  
 歸國の準備を整へて居る。

南洋群島の支那日本と交通歴史

今日日本は瓜哇瀾洲へ直航するに安慕伊那を海驛とする

が捷路をなして是れは南風帆に限りて汽船を以て積る  
 必要あり且其荷物揚卸しつち算ありつち算り臺灣香島間  
 を主としてあるに於て安慕伊那航路はまた人に知られぬ  
 ありたりをから航路は東經百二十度にして臺灣香島間の  
 直北の緯は當り凡そ緯線三十三度(約我の洋海を隔てる  
 こと)なり其航路は非なる者馬尼刺港より南進し蘇祿三島の  
 海門を經過し勃雅泥河に當り白の間に駛行し勃雅泥河に達するは  
 一直線の航路であつて南洋に於て第一目録の要衝なり是れ  
 近き將來に南洋の蓋を開きしつれ勃雅泥河に當り百  
 通起し其時勃雅泥河の船舶の必由なる港となるであらう

地理

は過去の歴史を聯想せざるを得ぬ。

南洋群島の民族は海上に冒險的の行動をすすむ習性を見、蘇  
の如き海賊の雄々たる附近に震怖されて居る。非  
宋より勃羅泥河の里百瓜哇、其他各島の酋長と豪が支那の厦  
門に交通したゆえに甚だ古く瓜哇の事は既に宋書に見えてゐ  
ば厦門がまだ閩越であつた。我邦が常世國と稱へた時代より往  
来が始まり其結果が今た各島の安港に支那人が多く寄留し  
て商權を執つてゐる所である。我邦は鎮國政策を  
布れぬをらば必ず彼を讓らぬ結果を收めたりといふは理想  
に非ずや。信ずるの事ある。歴史は信自すれば推古帝の比

り薩隅の島々を山つて交通した夜久多福の羅合衛の  
南蠻はそれである。更に遡つて九列の蠻行して能叢の佳く  
亦それであり止むに肥の書薩の書を傳へた原地である。九列  
り中國南海を横行した海賊は皆南島の時、氣脈を通した  
様に身かれは皆南洋群島より移植された人種をたしかま  
問題が起つては研究の趣味をかゝるのである。

余は先年日本古代史を講じた。今は勃羅泥西内部の山中に  
ソオ族といふ薩夷の部落は其樂を巧みたり。勃羅を海に耳附  
の假面をかきり舞ひ、馬毛を衣飾した楯を執り野をすし  
植物の纖維を組織するたゞし。聞傳うまは昔の佳く司る佳く

藤原



8

最精男女自童時習之一人持短刀可敵數十人海場帆海上  
 海賊望而引避聞其名無不辟易者其種人散布諸島國  
 之見其者彼等が高武の稟性は男女ともに童の時より劍術を  
 仕込まれ短刀の技の勝つる者も首領を掩余我中古の滑り  
 倭寇をいふかと思ふ程の似てあり其種人が諸島國た散布  
 する中我日本のみを除くには當らぬ少くも九州四國を  
 ぐるまると其血が混りあつていふは恐ろしめ著者の  
 徐氏の評論を下す蓋吉在島番中別一種類泰西人稱爲  
 南海之傑其人武勇且知孝養得此輩數萬可以固圍一  
 創一制其僻處荒島無詩傑以爲之倡也<sup>亦情</sup>

國感である。前年我日本軍が強大の露露西軍を破つた報を  
 里百人が傳へ聞たとき其前に米國が非之實群島を占奪す  
 るとあるは彼等在日本人なり是より此西軍を取らるるであらう  
 と皆身構へをうたへ聞く其建氣を其性ゆかりに地が  
 なる。必ず早き時代に日本に移動し四國の恒悍なる武士の氣  
 質に其遺しあるに相違なく其種人其遺る諸島國  
 國創一制を遂げて世界に雄視するもは彼等亦自ら  
 せんきある。

駿河島は馬加撒の對岸にある地は其種人の首を散  
 布する所であるが其種人については同書に

島國の二 51

練精原



南 9 新口本

9

又一種番名武敦剛猛類武吃居馬甲撒之南諸島  
馬加撒の南は駿波をいふ、其地群島は武敦人であり、在り南  
洋を巡航した汽船乗組士官のいふに略圖に摩尼の南に羅市  
といふ小島あり、とある、此島に發した人種の名である、今度  
大隊の乗組員が上陸を始め、夫を見、直ぐ其骨相を聲の  
我日本人酷似する感あり、然るが彼土人は亦同一く愛親力を  
發し、近づいて手探はかりに意を遁下、其王家に至ると、同俗を  
見、肩がらに、深澤に是事、刀を佩た一般民、即ち物當る賤民  
まで、銃状の小刀を佩るや、上等の者は大刀小刀を二つ佩り、長き  
矛を持つ、(其兵器)即ち土人の資格に當る、其地の武器は毒を  
こ射る箭や抛る具をも持つ、(上)是れ日本の大小をさし  
槍を持つ、同俗なく似て、あやしくゆかき、言を試み、  
ば、洋語は口混れ、日本語(は直)直似、得て、あし、聲が似、あるに  
驚き、又渠が米を甘子といふ、踊るをマイといふ、を聞て、渠等は  
日本の言語が遺した子孫ではないかと想け、もつに至つた、と  
いふ、骨相を聲と風俗を、各種の研究を、言語、以上の数點を有  
い、歴史的に証明するに、骨力が、その、  
斯くも我乗組員は、渠等が、自らを、尊敬する、  
着古た、襪衣、交換せし、た、た、た、た、た、  
が、是、は、ダツ、チ、荷、蘭、人、を、い、ふ、が、銃、を、發、射、す、る、に、因、り、用、を、

棘林原製

中産階級は、其方で示した槍を容易に離さぬようして着廣  
 コートで交換せんとすれど白くすいかな諾きあたしを白衣の必ずし  
 尊むるのめをこそ示す遂に誇られたる住宅を往て受取るときは  
 甚だ怖くは様子であつたといふ。此事を歴史的にいへば日本は同  
 一である刀を身より上古より士の必携具とす。来り平民まで脇  
 指の小刀を帯へ卒とせしむる大いなる物を許され士以上は鑑を持  
 す。はであつたが、此の比より持離のケール(小銃)を用ひて銃陣  
 を用ひしこと傾き明治の初めに精銳とせられた改まりたるも  
 廢刀令が布告されて鑑刀は廢れた。此歴史を回顧すれば、集  
 が矛を手離し、そのを惜みだすこと同情せぬを得ぬ。永く鑑を  
 して我を信はるべくも物である。是たて日本中の血液に尚武  
 の氣風が湧いて大小刀を帯へ鑑矛を執て奮戦たる稟性を  
 逆澤して身ぬる武吃人や武教へが南洋より持渡つたものと  
 いふことも甚だき妄謬となせぬであらう。駿渡島は山多き  
 渚地にて執帯をねばし裸體に白布を袴て生活しつゝ、  
 れど武器の持へのは應方にて實を用ひたしのである。四里百か  
 島、大いなる氣候は煩暢といふが武吃人の武器は更なる美で  
 ありし相像さるる更なるやきき意が動ふのである。  
 安泉伊那は近々二十餘年前に火山の噴裂にけり震ら清きよ  
 古麻中を有した土人の風俗は、去度より推定するべき物は無つ

たつた。

帯を長かつたけり

南

日本の南洋群島に於る将来

未来をいふは神權を犯す様子れど既に過去の歴史が現在に継  
 續したる中に天機を漏されてある明示の存するしよて此は多々の知  
 識の及ぶ限り尋ばすに發見するが天に對する秘めたるべきこと  
 あり見よ我地球面は四百餘年前まで僅し東半球の北半面のみ開  
 明し而し東洋の洋は隔離し交通絶たしたのである然るに米洲と  
 喜望峯航路の發見により始めて西半球が現われ東洋の洋も  
 が開けそれと同時に暗黒を南極曙光がぞ初めた是に於て  
 西洋の四班牙葡萄牙を首とし荷蘭英吉利諸國が南半面の  
 暗黒を利して領土侵略を始め米洲の印人濠洲の土人の如き  
 土地を漠として生ひ希疎を以て驅けさるるに至つたれど南洋群  
 島既に去那日本と交通し人々と殖殖しめれば頗る欺瞞し  
 憂目た遇はれども亦西葡二國の企圖し失敗に歸した薩英  
 之を鑑みて侵略をやめ土人を懷柔し利権と奪の主義を以て  
 改訂せられた此四百年間西半球と東の南極の領土侵略の行は  
 たるが前期で利権と奪の行はれたるが後期である而此百年間  
 は蓋し電氣の力によりて交通の便を南の全地球に益々頻りに往  
 來を遂げ時運となり因て南半球と濠洲と西大陸の曙光が晨  
 朝を以て開くるに至つたの即ち世界の知力能力を地球の南  
 半球に注ぐべき天の明示といふべきである

東洋叢書

現今地球南半面開く時運より北は濠洲に見ても南米洲に見  
 ても明白なるは言を待ぬが之を侵かりたるは東半球西面の歐州人  
 であり、其の利権と奪を獲めりたる東面の日支人は南洋と古き露  
 のある猶ほ陸路に非過きりたる神に對して相濟ぬ事し、其  
 時勢せらるるは然る南洋群島現在の状態は如何といふは總て  
 熱帯の裸體的な生活にて富んぶとの持ぬ即ちまだ利益を成さざるを  
 いさむは將來は有るべし、其の極といふべきは、彼我文  
 通の衝に位し、其の駁安人は日本人に克く省し其體質は一身を以て春  
 不登の色を現けり、其の骨格運々、而して操舟の勞運が天  
 秤棒に竹狀の物を肩に擔ぎて水を運ぶは我日本人と同俗なり、  
 見ても其の力の小を、玩具に近く又操舟の如きものにて水を運ぶ器  
 を造る、或は瓢箪の把柄を施し、水を入る、(操舟の) 力を  
 用い、程量もあらず、操舟が操舟の具として水底の淤泥を汲むに于て  
 其の力も其の人氣も減る、未だ勞働の事も知らぬ子供  
 に向つて、其の力も減る、是を畢竟天然に生活して産業の營みも教  
 へず、故の懶惰である、操舟が大小刀を揮ひ矛を把て人を刺殺す勇  
 力を用ひ、其の力も減る、操舟の具を執つて耕作樹藝を教へ、其  
 は於て劣弱の者たる、師を以て堪て、今も信後、其の力を收め、  
 利を以て操舟を多し、其の力も減る、其の力も減る、  
 駁安、濠洲の山地にて水田の稻を産せ、海には鰐魚群を以て産業

東林演説







16  
南

いそぐ一が其地大に到る人土と相接する間感觸互  
 に親愛方の生ずるは自然に相証され而して其風俗習性まで  
 類似するを觀之を法道すの心を惹起し言語を交換せんとす  
 れは音調の記憶は早きを相悦び互種捧ぐて嬉々を見し重量の  
 多きを堪へざるを起し去る者も嗜好は水田の耕  
 作を善法するを志し生ずるを遂く我日本人に存せしむ特殊の  
 潤澤である此自然の動機に從はば是より多クは唐過より欺騙  
 未利權を採らぬを憚り情種發し彼を親愛して  
 歡心を得て之を法道す人心を收攬して殖産興業を教  
 え互に其利を享べし貿易の道理道身は轉由して相文  
 通する主義を執るのであらば通年東の海を舟の向はるは  
 同にして相排斥し相嫉妬し白福善福の論物に起る人道の  
 常規を逸する事多きは之を究むるは西洋人の利益執持へ本  
 心算が利權を奪はば偏執の増長しはる由りめにして  
 第三子の利權を奪はば末期となり念將攬作して有徳賢  
 易の真理を隨ふて平和を保ちまはす正道に向つてある現象を  
 觀測するであります。

大正三年一月十五日稿

大末邦武

大末邦武